

エゾマツ



2010年 冬季号

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目 次

2020年1月19日 91号

会長 ミネルヴァのフクロウ

会長 田村 允郁

1、育成研修会、自然観察会、自然調査など

<育成会>に関して

- ・気付きと喜び 札幌市 吉野 聖
- ・ボラレン育成研修会のぞいてみてある記(2) 札幌市 吉田 政徳

<自然観察会>など

- ・「秋の森の匂いをかごう」に子供と参加して 札幌市 中村真由美、正幹
- ・秋のありがとう観察会に参加して 札幌市 阿閉 信義
- ・延ばそう“健康寿命” 札幌市 浅見 文貴
- ・「クリーンクリーン野幌森林公園」に参加する 江別市 中西 敏雄

<自然調査、研究>など

- ・ウトナイ湖 花の季節 札幌市 滝村 大輔
- ・礼文島の自然から見えてくること 札幌市 道場 優
- ・獣医師から見たペット問題 富良野市 南部 栄一

2、連載

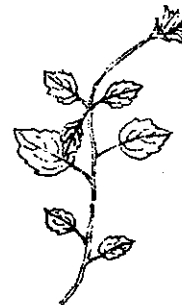
- ・羽の動きについて 苫小牧 谷口勇五郎
- ・2009年度新しく出あった植物から思うままに(1) 平取町 川村 桂介

3、小樽支部長の北原さん“前田一步”受賞に関して 会長 田村 允郁

4、支部活動、観察会資料、役員会など

- ・オホーツク支部機関誌から 熊野さん(支部研修会に参加)、小栗さんのレポート
- ・晩秋の森 観察会の資料 コース案内、地図など
- ・第三回 役員会 資料

編集後記



ミネルヴァのフクロウ

会長 田村 允郁

昨年12月の初旬のことでした。風もなく穏やかな天気誘われ、野幌森林公園にフクロウに会いにでかけました。平日の午前中ということもあってか、出会う人もなくゆったりと目的地まで歩をすすめました。立ち枯れの野草についた霜がキラキラ光っていました。フクロウ情報では、例年いる場所に寄りつかなくなったとのこと。あまり期待もせず目的地まで行ってみると、ラッキーなことに洞のなかに2羽寄り添っていました。目を瞑り身動きしない様は他の野鳥の姿と何かが違う感じがします。

フクロウの祖先はおよそ1億年前、白亜紀に生存競争の激しい昼の世界から夜の世界に移り住むようになり特殊な進化を遂げたといわれます。夜の世界に生きるため、瞳孔が大きく、弱い光に敏感な桿体細胞が網膜に多いため夜目がききます。また、遠目は勿論のこと数10センチ以内の近い範囲も見ることができます。このようなことからフクロウの目の感度は人間の100倍だといわれています。

両目が頭部の前面にあることも他の鳥類と異なるところですが、上下にも僅かにずれていますし眼球は眼窩に固定されているため眼球をうごかせません。その代わり頭を真後ろに向けたり上下を反転させたり、自由に回転させることができます。これは頸椎が12~14本と多く回しやすい構造になっています。ちなみに、人間を含め主な哺乳類の頸椎は7本です。

その他、耳穴の位置が左右非対称なことにより音源の方向を立体的に認識したり、パラボラ型の顔面の羽毛が対象の発するわずかな音を集めることもできます。また、羽毛は柔らかく、風切羽の周囲には綿羽が生え、はばたきの音を和らげる効果があるためほとんど音をたてずに飛行することができ、この原理はJR西日本の新幹線500系電車のパンダグラフに応用されているといえます。

図鑑などに解説されているフクロウに関するうろ覚えの生態を頭の中で反復しながら改めて洞の中で微動だにしない2羽を見ていると確かに超能力を備えている姿に見えてきます。

フクロウに関する日本の伝承を調べると死の象徴とされ、フクロウを見ることは不吉なこととされていました。しかし現在では「不苦労」「福郎」などのゴロ合わせで福をよぶものとなっていて、置物やマスコットになっているのは知っての通りです。アイヌの人たちはシマフクロウを守護神コタンカムイとして、エゾフクロウ（フクロウの北海道亜種）を獵運の神として崇めていました。

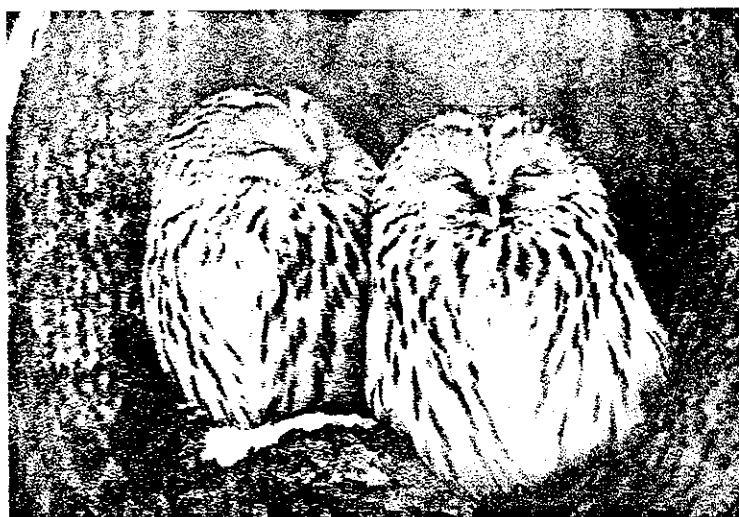
西洋では古くからフクロウは学問の神とか英知の象徴とされていました。それは、学問の神ミネルヴァに仕えるフクロウは素晴らしい頭脳と見識を持つということから

きています。もう少し詳しく述べると、学問の発祥の地ギリシャ、アテネの近くにミネルヴァの森というところがあり、この森にフクロウが棲み、夜になり森が暗くなると飛び立つとのいわれがあります。

このミネルヴァは地名ではなくギリシャ神話では女神アテナイのことで、ローマではミネルヴァと呼ばれる女神になっていて、ギリシャ神話やローマ神話は頭が混乱してきます。

ミネルヴァとフクロウのかかわりにつて、「ミネルヴァのフクロウは夜飛び立つ」とか「ミネルヴァのフクロウは黄昏にようやく飛翔する」との有名な言葉があります。この言葉は哲学者ヘーゲルが1820年に著した「法哲学」の中で述べている一節です。この言葉の意味する深いところは「人々は朝その日の事はわかりませんが夕方になると様々な失敗を重ねることにより、少し賢くなっていてその知恵をフクロウにあつめさせるのが知恵の神ミネルヴァの役目」であり、ヘーゲルはこの神話を通して「どんな賢い人でも未来のことはわからない、真実はいつもその時代のすべてが明らかになった後にしかわからない」ことである、と解説書を読みながら勝手な解釈をしました。この言葉の哲学的な意味については、私の頭脳ではこれ以上のことは歯がたちませんでした。

洞の中にいるフクロウをしっかりと写真に収め帰路につきました。帰りの道を歩きながら「来年はどこかでフクロウの羽をゲットしたいな」などと、ミネルヴァのフクロウの哲学的意味などとはまったく関係ないことを考えていたのです。



野幌森林公園のフクロウ

8月28日からの3日間、レンジャー育成研修会に参加させていただきました。実は、仕事柄、今年の5月から自然解説を行うことになったのですが、これまでの人生で自然について解説をした経験が無に等しいため、何をどうしたら良いか、戸惑ったのが参加のきっかけでした。仕事でお世話になっている先生が行った観察会のことを思い出し、わずかな知識を基に、見様見真似でガイドの実践をしてみました。その場は何とか凌げるものの、自分でも物足りなく、基礎を学びたい、少しでも良いガイドをしたいと感じ、まずは、ガイドに関する書物を探しました。しかし、何かしっくりこなく、まさに机上の空論であり、理論を知っただけで更に物足りなさを感じました。

そこで、出会ったのが北海道ボランティア・レンジャー協議会さん主催の自然観察会でした。春から何度か参加させていただき、その都度、レンジャーの方のわかりやすく詳しい解説に多くの発見と喜びを感じ、質問を交えた解説では自分の知識に少しだけ自信が付きました。なぜ、こんなに充実感を得られるのか？

今回の研修会では、レンジャーの基礎や心構えをご教示いただき、多くのことに「気付き」ました。参加者の気持ちになって一方通行ではない、名前にこだわらない、参加者の良さを活かす、そして笑いを忘れずになどなど……。春の観察会では、そのような技術を駆使しながら参加した僕らを楽しませてくださったのだと、恥ずかしながら思い出します。

環境という言葉を目にしないことがない昨今ですが、肩に力を入れ過ぎず、少しでも多く人間が自然を楽しみ、理解し、尊敬する気持ちを抱くことこそ大切なかもしれせん。自然は、人間の想像を遥かに超越していることに驚かされますが、なにも山奥深い自然に限らず、身の回りのごく普通に目にする生き物にも、生き残り、そして子孫を繁栄するために、驚くような巧妙な仕組みと強かな戦略に満ちていることに気付かされます。

お忙しいところ、ご指導いただきましたレンジャー協議会及びふれあい交流館の皆様、「気付き」の多い有意義な研修を、本当にありがとうございました。また、ご一緒させていただきました研修受講者の方々、どこかでお会いできる日を楽しみにしております。

良い案内人になる要素である知識とセンスと自然観と技術を磨き、自分なりにアンテナを感度良く保ちながら、森へ出かけてみたいと思います。

ボラレン育成研のぞいてみてある記(2)

札幌市 吉田 政徳

野幌森林公園の木々がすっかり葉を落とし、静まりかえっています。静けさの中に動物たちが忙しく回り、植物の芽はほころびの準備をしています。見通しのよい木立の間から命の鼓動が伝わってきます。

前号でボラレン育成研の様子をレポートしましたが、紙面の都合により、全てを伝えることができませんでした。そこで、今回は「俳作り」と「環境と生き物」について補足します。

1、俳句作り

人数 24名

準備 サインペンと紙(人数分) セロテープ数個

場所 平坦で硬い場所

方法

- 1) 身近な所からお気に入りの花か葉を摘んでくる。近くの人たちとその植物について会話をする。
- 2) ペンと紙が配られる。紙を三つ折りにし、右上に摘んだ植物をセロテープで止める。
- 3) 植物に思いをよせて、ありのままの気持ちを五文字で一行目に書く。季語にこだわらなくてもよい。
- 4) 紙を下に置いて、前の人が書いた紙に移動する。二行目に続けて七文字を書く。
- 5) また、移動して三行目に五文字を書く。
- 6) 最初に書いた紙に戻り、自分が選んだ植物がどのように作られたか見る。
出来上がった俳句を読み上げる。

このゲームは一人で作る俳句と違います。想像した通りに流れた句もあれば思わぬ方向に発展した句もあります。アレンジすることにより、室内ゲームにも楽しく行うことができると思います。

2、環境と生き物の関係

人数 24名

準備 10m位のロープ2本、赤い帽子(キツネがかぶる)10個位、
ミズナラの実を入れた筒12本 ヒマワリの実を入れた筒12本

方法

- 1) 一人ずつに筒がくばられる。
- 2) 耳元を筒を振り、同じ音に聞こえる者同士集まり、筒を用いて中の実を確

かめる。

- 3) ミズナラはウサギチーム、ヒマワリは環境チームになる。
- 4) 両チーム、約15mの間隔を空けてロープに沿って横に並ぶ (図1)

- 5) ゲームの動作を決める。ウサギが水を飲みたい場合は、手を口にあてる。腹が空いた手を腹に当てる。住みかが欲しいのは、手を頭の上に屋根形にかざす。ウサギの欲求動作に応えるように環境が同じ動作をする。

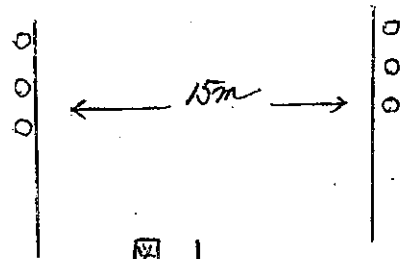


図 1

- 6) 両チーム後ろ向きに、ロープに沿って並ぶ。「ヨーイ」の合図でそれぞれ動作をする。「始め」の合図で向き合い、ウサギは自分の求めた環境を探し出し急いで自分のチームにつれ帰る。ウサギチームに入った環境はウサギになる。欲求のかなわなかったウサギは環境になる。これを何回か繰り返す。ここでは14回。
- 7) ここでは意図的に飢饉やキツネの登場を設定する。飢饉の場合は環境チームの一部がしゃがみ込む。キツネは途中で事故に遭ったことにして、片足で走る。
- 8) このときのウサギの変動を図2のグラフで表す。心ウキウキ、弾む体、疲れを忘れた子どものような生き生きとした参加者の動き。あいにくの霧雨に翅を休めていたカンタンがあわてて動き出す。そこには、自然と生き物が一つになった世界がありました。

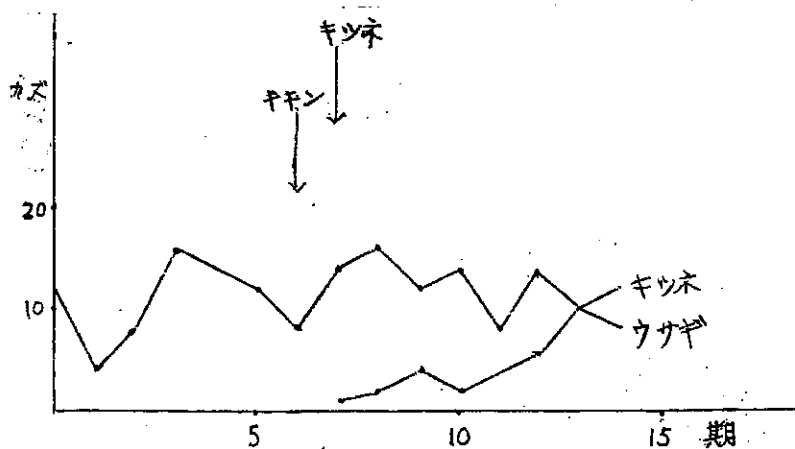


図2 環境の影響によるウサギの変動

<考察>

図2のグラフについて考察します。1期目のウサギの減少は、ウサギが環

境に慣れなかったものと思われます。(ゲームでは、ゲームの要領が十分理解できなかったのではないか)。その後、増加するがピークを過ぎると減少しています。6期目の減少は飢餓におそわれたものです。再び増加しますが、キツネの出現によりウサギの減少が見られます。10期目にキツネに何らかの事故があり、ウサギが増加します。

その後、両者の数に増減が見られますが、13期目に両者は交叉しています。サンプル数を多くし、長期のスパンで考えると、一つの傾向が見られるのではないのでしょうか。

自然の森では、ウサギの大発生はめったに起らないといわれます。それはキツネや大型のタカ類によるウサギの捕食により、バランス調整ができているものと考えられます。また、環境による影響は、一年後にズレて現れるようです。

このレポートでは是非お伝えしたいことは、ふれあい交流館の職員の方の活躍です。

明解な指示を出し、軽快なテンポでよどみなく進める濱本さん、準備にそつ無く機敏にサポートする扇谷さん。冷静沈着、さりげなく全体に目配りを怠らない松井さん。まとまりのある連携プレーはお見事なものでした。敬服！！

ふれあい交流館と道ボランティア協議会の共催によるボラレン育成研が成功裡に終わりましたことをみなさんと喜びたいと思います。両者のご発展を心からお祈りし、報告を終わります。

<資料>

環境によるウサギの数の変動 ふれあい交流館 2009,8,28
参考図書 『森林の動物学』 西口親雄

* * アメリカに研修に行って帰国したエゾマツ君に聞く
(ブッシュ政権からオバマ政権に移行してから)

エ Embarrassment (困惑することばかりだよ)
ゾ Zommbi (ばかげていることが多いよ)
マ Manner (マナの確立はこれからさ)
ツ Turning (方向転換は始まったばかりだから)

10月15日(木) 10:15~14:30

『秋の森の匂いをかごう』に子供と参加して

中央区 中村真由美・中村正幹（まさき）

この観察会は、私が今年から「円山動物園の森」ボランティアガイド研修を受けていて、そこで日程を教えて頂いて参加しました。野幌森林公園へ来たのは何年も前にエゾフクロウを見に来て以来でした。私達の班はレンジャーの熊野さんとIさん。お二人も動物園の森のガイドの方です。年中の息子も加わり、少人数にして頂きました。

出発してすぐ、熊野さんは笹の葉に触らせてくれました。時々雨が降り、イタヤカエデの「イタヤ」の説明を聞きながら、みんなで雨宿りをしました。雨が小降りになり、歩きだすと熊野さんは正幹に大きい虫眼鏡（100円ショップのものだそう）を貸してくれて、子供に見たものを説明してくれました。Iさんと私は道外出身のためか、どんな話にもあれこれ質問しながら歩きました。

コシアブラの淡い黄葉、図鑑で花を見せて頂いたアケボノジュズランはIさんも私もとても気に入りました。動物園の森でもオオハンゴンソウを抜きましたが、野幌森林公園では抜いたものからさらに花・蕾を摘んで分別したそうですね！ 帰化植物や自然の森の話が大人がしていると、後半正幹は飽きてきたようで「早く行こう～」と言い出し、Iさんが遊んでくれて歩くことができました。ありがとうございました。

今回初めて北海道ボランティアレンジャー主催の観察会に参加しましたが、少人数で班を分け、それぞれにレンジャーさんが入ってくださって感激しました。帰ってから、子供に「また行きたい？」と聞くと「行く！」「おもしろかった」という答え。先日円山の下を一緒に歩いていたら「これはまっすぐだから植えた木。」と言うので、「あ、野幌森林公園で大人の話聞いてたんだ」とびっくりしました。その日は円山の桂の落葉がよく香る日で、あちこちに「わたあめレストラン」があり、上機嫌でした。

小さい頃の匂いの記憶はいつまでも残りますね。私にとっては「秋の稲刈り」の匂い（渡し船で通学した山形の田舎育ちです）。今の子供達も「桂の落葉」の匂いは体験したらきっと忘れないですね。私も皆さんのような観察会を体験しながら活動し、もっと通学路に自然が増えたら…と思っています。

最後に正幹が通っている園を紹介します。西区平和にある無認可保育園の「子どもの森 ポラーノ」では、秋は山の恵みを自分達で採ったり、味わったりの日々。満2歳の春から入園できます。お子さんやお孫さんが近かったら、ぜひどうぞ。



秋のありがとう観察会に参加して

平成21年11月8日(日)

札幌市東区北28条東15丁目1-12
阿閉 信義

春はぎょうじゃニンニクやうど、ごみなどの山菜取り、夏はやまべ、岩魚狙いの溪流釣り、秋は優秀な食菌といわれるぼりぼりやエノキタケなどのきのこ狩りなど山や川の自然の恩恵を受けながら、その時々季節の旬を楽しみ定年後の趣味を謳歌している昨今です。

今回は北海道新聞の週間予定行事の記事を見て、初めて自然観察会なるものを体験しようと妻とともに参加しました。

野山に生息する草木の生命力の不思議なメカニズムや繁栄のためのしたたかな知恵と逞しさを驚きとともに理解させていただきました。

特に、

- 近年の外来植物(セイタカアワダチソウなど)の旺盛な繁殖力による在来植物生息域への侵略、駆逐に驚かされる。
- あらゆる草木の種子が動物の活動や風などの自然現象の介在なくしてその植物の繁栄があり得ないことを思い知らされる。
- 繁栄のために進化した種子の構造や緻密な仕組み、鳥類との連携による共存共栄
- 緑のまま越冬するというエゾユズリハ、シダ類など北海道型常緑草木
- 草木類の名称の由来やいわれに納得

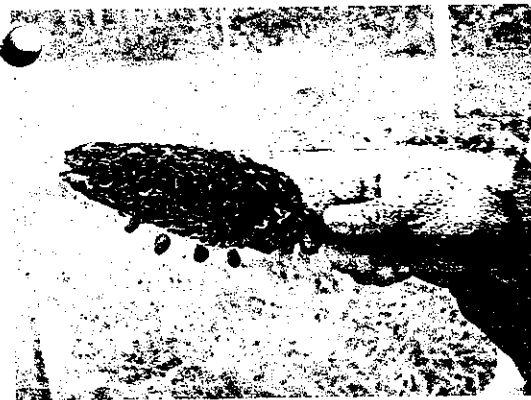
等々すばらしい本物の体験型の学習をすることができました。

本来の目的である森のゴミ拾いのこともすっかり忘れ、ボランティア(自然観察員)の方の種子のサンプル活用によるひとつひとつわかりやすい具体的、きめ細かい説明に感銘しながら8000歩(万歩計)をゆっくりと歩きました。これからは積極的に時間的な余裕をつくり、是非、次の観察会にも参加したいと考えております。

おかげさまで今後の楽しみがまたひとつ増えました。

同行して説明していただいた自然観察員の宮本さん感動をありがとうございました。

あとじ のぶよし



【ホウノキの種子】



【エゾユズリハ】

延ばそう“健康寿命”

札幌市 浅見 文貴

参加者の中に、個性ゆたかな質問を繰り返えずナチュラルリストが存在すると、森の自然観察会も性格がガラリ変わってしまう。秋ふかまる11月3日、野幌の大自然公園で行われた「晩秋の森観察会」は、まさにそれを象徴するイベントの様相。もっぱら食用植物探しのグルメ・ツアーとなった。もっとも、この日の参加者がなべて、そのグルメ探しの味つけにひたった分けではない。たまさか観察班編成の際に偶然、加わることになった我がパーティ6人(ガイド1人)のできごと。この種の観察会では、きわめて珍しい、ハプニングのたぐいにはいるか。“自然観察アニマル”にはなおキャリア不足の私がそう思うのかもしれないが、珍妙というのか、その参加者には失礼にあたるので、この表現は笑って切り捨てる、としても貴重な体験にして、ユニーク感ぬぐえぬ思い出づくりの一日。しかも自由と平和と自然を愛し、なおかつ香り高い文化創造を促進する“文化の3日”であるから印象が殊更つよかった。前口上、イントロが長くなってしまった。

「先生、これ食べれますか」。本稿の主人公である、年齢はたぶん還暦前後とおぼしきご婦人が伊藤秀平案内人に第一の質問の矢を放った。「ええ、食べれますとも」。「常緑低小木」の一種である赤い実をつけた、ひときわ背低く、ものみな紅葉する樹木が林立する中でも、確実に年輪きざむ緑あざやかな小さな枝葉に深紅のこれまた小さな果実。

ご婦人の行動はすばやかだった。伊藤指導員が食用OKのサインを送るかいなや、彼女の口控に紅実はずでにほうり込まれていた。林道の地面ワキに密着するように野幌の森で生命を燃やし、生き貫く低小木、観察していて、その凄惨な生命力にただ、ただ歓心するものの、「あつ、それはダメよ。エキノコックスが。みちばた(道端)にたれさがったものは」。しかし前述のようにチエツクの声もアトの祭り、彼女はすこしもゆるぐことなく続けた。「一回たべて、それで逝ってしまっても一度きりの人生じゃないですか」。豪胆か、それとも食べてしまったあと講釈か。しかし、度胸すわったこの根性、己が悪くても他人に責任転嫁する今様の若者に聞かせてやりたいセリフ。まさにご立派にカップを着せたいくらいの見あげたスピリット。

つまり責任をもたない自律失調現象。実はこの根底にあるのが「社会が悪い、他人が悪い」とする短絡的な意識。そして、その結末がいとも簡単に人殺しに走る犯罪へと。デプレスパイラルの嵐が吹きまると、生きていくうえで

ます求められてる自己責任。ご婦人の寸言は自律神経失調者の心の臓にグサリ突き刺さることだろう。

人生は旅である。自然観察もその旅を豊かにする旅である。そして自然共有の持続と保護こそ、人類に与えられた最大にして最底の責務、例のご婦人を含む私たちは、晩秋迎えてすっかり葉落ちした裸木群の林道を縫うように約4時間半、林間にこだまする野鳥のさえずりを耳にしながら、降り積もった落ち葉が路面を一センチ嵩あげるのには10年はかかるという野幌の森を歩いた。

同行の同年輩と見られる清田区の平岡から参加したご婦人が言った。「食べられるものなら、これもどうかしら」。「ああ、おいしそうね」。「先生、どうですか、これは」。

「ハイ、食べれますけど、(私は食べていませんが)下痢するといわれていますけれどね」。

植物名を特定していたが、ここでは文字(活字)にすることで、これを読む読者に誤った知識を植え付けては物議のタネになるので敢えて削除する無礼をお許し願いたい。

全行程8キロ、世界三大自然公園と呼ばれる野幌自然大公園、5、600ヘクタールは数えきれないほどの動植物が生息し、劇的に進行する温暖化イコール自然大破壊の危機的状況の中で、今回の主催者ボランティア・レンジャー協議会(田村允郁会長・会員数160人)の23年間にわたる自然保護の活動は、決してハデなものではないけれども、地味ながら多くの参加者を呼び寄せる実績が、かけがえない野幌大自然の守護神たるんとする一助を担いつつ、なおかつ本稿掲載の機関誌“エゾマツ”(季刊)も通じて、地球温暖化を最も大きな敵として闘う基本姿勢は、560万道民ひとしく賛同するところだろう。

CO₂排出量ハイレベルの石炭全盛の時代、北海道は芦別炭坑で生まれ育った前出のご婦人が食用の樹木・野草にこだわる理由を聞くと、一にも二にも健康を自然に求める心根だ、とまったく素直であった。その裏には闘病克服の血にじむ思いがあったのだろう。しかし、男性参加者のひとりには、好奇心はるかに超えたどん欲な自然摂取欲に呆れる反面で、ひと言、「(人生)一回で済むことを思えば、なんでも食したら」。見るからに毒々しい極赤の実つけるまむし草やいちいの赤い実は食べられてもタネは猛毒であるムネを伊藤指導員から説明されても、自然まるごと盲信するご婦人の薬草信仰欲は止まるところを知らなかった。

北海道医学会(事務局=札幌北区15条西7丁目)が調べた“健康寿命”の資料がある。世界一を誇る日本の平均寿命(男 79・29歳、女 86・05歳 厚労働省調べ)とはまた異なるもの。殿がたは72・3歳に対して、姫がたは77・

7歳、平均で75歳で、これまた世界一の嬉しい記録。

寝たきりで百寿者であるより、健康で百寿を生きる者の差は天と地の違いが
あろう。“健康寿命”とは同じ年齢でもまさにこの大差を縮め、なおかつそれを
凌駕するものであって、大病から立ち直って野幌の森を観察散歩した例のご婦
人が食用植物に猛執した背後には、おそらく“健康寿命”を希求する強烈な想
いあったものと推察される。人生最高にして最大の實力者は、健康長寿である。
その心は新しい文明、文化を己の目で確かめることにある。

2000年にはいって9回目を数えた昨年の文化の日、野幌の深まりゆく秋
に、植物グルメならぬ“薬草回帰”の念を高令社会に突入した筆者も、しみじ
み痛感させられた。意義ぶかい一日であった。

(21年11月3日 浅見)

《今年度 役員改選の年》

立候補のお願い ⇒ 自薦、他薦で!

今年度は任期2年の役員改選の年です。今日まで、私たちの会はかなり大き
な実績を残してきたように思います。今後の会の発展のためにぜひ立候補を願
います。自薦でも、他薦でもOKです。

連絡は田村会長、春日事務局長まで。

《今年度の総会》

4月17日(土) エルプラザ 2階、環境研修室(昨年と同じ場所)

- ・ 研修会 13時30分～14時50分
講師 会員で鶴川の鳥の写真家 門村 徳男さん 予定。
先月号に、門村さんから送っていただいたとても貴重な写
真「コウノトリ」を掲載しました。
- ・ 総会 15時～16時30分

「クリーンクリーン野幌森林公園」に参加する

江別市 中西敏雄

始めてこの行事に参加した。標題を見た限りでは、何の行事かわかりづらいつられるが、要するに野幌森林公園のゴミ拾いをする行事であった。ゴミと言っても電器製品や本類、ダンボール、プラスチック製品等大小を問わず不法投棄されたゴミ類を拾い集める行事である。

当日（10月22日）は道庁環境部、石狩森林管理署等が中心となつて、日頃野幌森林公園を利用している各種団体に呼びかけて、およそ数団体、50人程度が登満別森林の家前駐車場に集まった。江別市からはゴミ収集車1台、その他関係機関から軽トラック2台が参加した。ポラレンも呼びかけ団体の一つとされている。

午前9時30分ゴミ袋と火ばさみを係員からわたされ出発する。参加者は、登満別側と瑞穂口の両方から基線に沿って進み、両者が合流したところで登満別駐車場に戻る集め方でスタートした。出発前の駐車場にはすでに、テレビ、ソファ、戸棚、古タイヤその他が軽トラック2台分程度収集されていた。それらを眺めながらの出発であった。道路が舗装されている登満別から中央線分岐あたりまでは、殆どゴミらしきものは無かったが、砂利道にはいり厚別方面に向かうと道路から数m入ったヤブから古雑誌、ダンボール、ビデオテープ（H系）、プラスチック類、空き缶、ペットボトル等が次々と出てきた。道路縁に出しながら前へと進む。その後をトラックが収集しながらついてくるが、最終的には、トラック一杯の投棄物が集まった。

今年2回目のクリーン作戦ということであったが、参加者の中にはこの行事が始まった頃には、こんなものではなく大型ゴミを含め今回の数倍の量があったといわれた。今回は少ないとの評価である。しかし、始めて参加した者にはスゴイ量だと感じさせられた。

参加した我がポラレンメンバーは田村会長はじめ8人が参加した。公園はあざやかな紅葉がすすみ、見頃はやや過ぎた感じであったが、帰途何事か熱心に観察しているメンバーが見られた。さすがだなーと感心させられた。参加団体や人数はおよその表現しかできなかつたが、急な原稿依頼のためそれらを正確に把握していなかつたため、あやふやな内容になってしまったことをお詫びする。

ウトナイ湖 花の季節

札幌市 滝村 大輔

2009年4月から9月まで、私はウトナイ湖散策コースで植物を観察した。ここではウトナイの四季を振り返り、その記録を自然観察などの基礎資料として報告したい。

1. 春の章 (4月～5月)

4月上旬、レンジャー入れ替わりの時期、まだ遠方の山々が雪に覆われ、木々が芽吹かない中、林道沿いではナニワズが咲き始める。水溜りでエゾアカガエルが産卵するが、エゾサンショウウオは見られない。ネイチャーセンターの庭では、冬眠から覚めたシマリスがヒマワリを採食し、木材の間からエゾヤチネズミが顔を出す。またこの時期より、浅瀬では鯉の姿が目立ち始め、ハクチョウの餌の残りを採食する。湖岸では抱卵するコブハクチョウの一家や、氷上で獲物を待機するミサゴの姿も見られる他、イソシギやコチドリ、コサギ等の夏鳥たちも徐々に見られるようになる。5月、ネイチャーセンターでは、レンジャー歓送迎会が毎年行われる。マガンやヒシクイ等の旅鳥が、渡りの途中で立ち寄る。1つがいのオオハクチョウと対岸で営巣するオジロワシを除き、冬の水鳥は次々と北へと旅立っていくが、林内ではナニワズに続き、オオタチツボスマレやフッキソウ、オオヤマフスマが、更に中旬にかけてオオアマドコロ、エゾエンゴサク、キシムジロ、エゾヤマザクラ、キタコブシ等が次々と開花する。湖岸では、バッコヤナギやエゾノカワヤナギ等のヤナギ類やエゾノコリンゴ、ズミ、スズメノヤリ、ハマハタガオ、セイヨウタンポポ等が開花し、オオジシギのディスプレイ等も見られる。

2. 夏の章 (6月～7月)

6月、オオヤマフスマなどの一部は7月頃まで花を咲かせるが、春の花の季節は終わり、林内ではコウライテンナンショウ(マムシグサ)、オオダイコンソウ、カンボク、ベニバナイチャクソウ、ゲンノショウコ、外来種のコウリ

ンタンポポやムラサキツメクサ等が開花する。続いて7月にはオトギリソウ、オオカナダオトギリ、トモエソウ、ゲンノショウコ等が開花し、ナニワズが赤い実を結ぶ。また、湖岸では、アヤメ科の花が開花し、それに続いてアカバナエゾノコギリソウ、コハギボウシ、ナワシロイチゴ、ホザキシモツケ、クサレダマ、カセンソウ、ナガボノシロワレモコウ等が開花する。水鳥の数は減るが、夕方になると、ニホンアマガエルの大合唱が聞こえ、対岸の草原で採食するエゾシカの群れと、夕日を浴びて旋回するチュウヒの美しい姿が見られる。またこの時期、鯉が繁殖のために浅瀬に集まる。白鳥の小径では、キタキツネ等に捕食されたと思われる死骸が見つかった。

3. 秋の章 (8月～9月)

8月上旬、最高気温が30度以上になる日も珍しくなく、オオダイコンソウ等の夏の花の一部はまだ咲いているが、湖岸ではエゾミソハギ、ハマナス、ミズオトギリ、ワスレナグサ、オニユリ、ネジバナ、サワギキョウや外来種のおオアワダチソウ等が開花し、ナワシロイチゴが赤い実を結ぶ。渡り鳥やサケのシーズンも始まり、本州以南で越冬するシギ、チドリ類が立ち寄り、ベニザケが遡上を開始する。林内ではエゾシロネ、キンミズヒキ、クルマバナ、チシマオドリコソウ、エゾタチカタバミ、ナミキソウ、ガガイモ、キツリフネ等が開花し、ヤマグワが赤い実を結ぶ。秋は間近であることを体感できる時期である。更に、中旬になると、ハマナスが赤い実を結び、エゾリンドウや外来種のユウゼンギクやセイタカアワダチソウも開花する。9月になると、湖岸ではエゾノカワラマツバ、ミゾソバ等が、林内ではキオン、アキノキリンソウ、ハンゴンソウ等が開花し、ヤマウルシの葉が赤く色づき始め、チョウセンゴミシが赤くて酸っぱい実を結ぶ。一方、美々川やオタルマップ川等では、シロザケが遡上し始める。

4. 冬の章 (10月以降)

10月、遠方に見える夕張岳はすでに美しく雪化粧をし、最高気温が一桁になる日も多くなったが、3日に「道の駅ウトナイ湖」が開館し、1日10万人を超える来訪者が訪れた。湖岸ではエゾノコリンゴやツルウメモドキが赤い

実を、ノブドウが青い実を結び、桃色に色づいたマユミの実を食べるメジロの姿が見られる。林内ではコウライテンナンショウが赤い実を結び、ハルニレやコナラ、ハウチワカエデ等の葉が美しく彩る。花も少なくなり、ユウゼンギクやセイヨウタンポポ、ヒメジョオン等の外来植物とノコギリソウ等がわすかに見られる程度である。春から夏にかけて浅瀬を埋め尽くしていた鯉の数は徐々に減り、遠いサハリン、カムチャツカ方面からマガンやヒシクイ、コハクチョウ、オオハクチョウ、オナガガモ等が渡来する。マガンのピークは10月中旬から11月にかけてで、最大で4万~5万羽にもなる。今年は群れにハクガンが混じっていた。またこの時期、恵庭岳や風不死岳、樽前山も雪化粧をする。12月になると、ネイチャーセンターでは忘年会が行われる。翌日の大掃除のために1泊し、明朝に湖面を眺める。野鳥の姿も美しいが、結氷した湖面が朝日を浴びて光り輝く光景も、ウトナイ湖の魅力の1つである。マガンやヒシクイ、コハクチョウ等の旅鳥は本州方面へ旅立ち、湖岸に残るのはオオハクチョウとオナガガモ、ヒドリガモくらいとなる。トキサタマップ川付近ではダイサギやアオサギが首をすくめ、冬を待つ。対岸ではオオワシ、ハイロチュウヒ等の猛禽類が獲物を待つ。花の季節は終わり、湖は4月まで水鳥たちで賑わう。

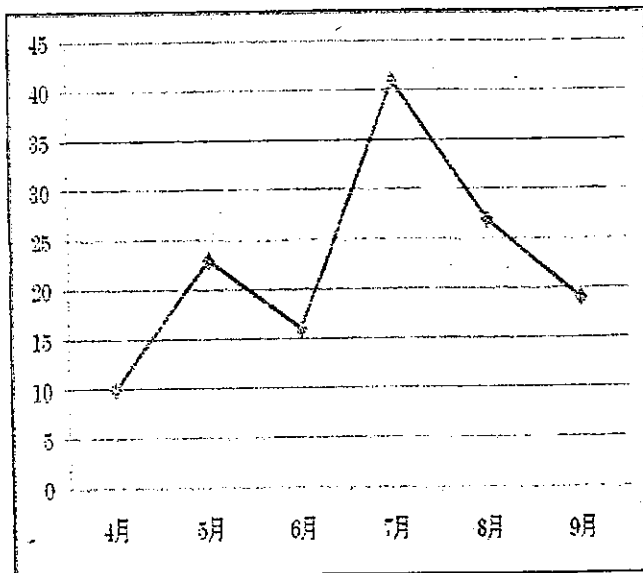


表.1 月別のつばみ、開花初認種数

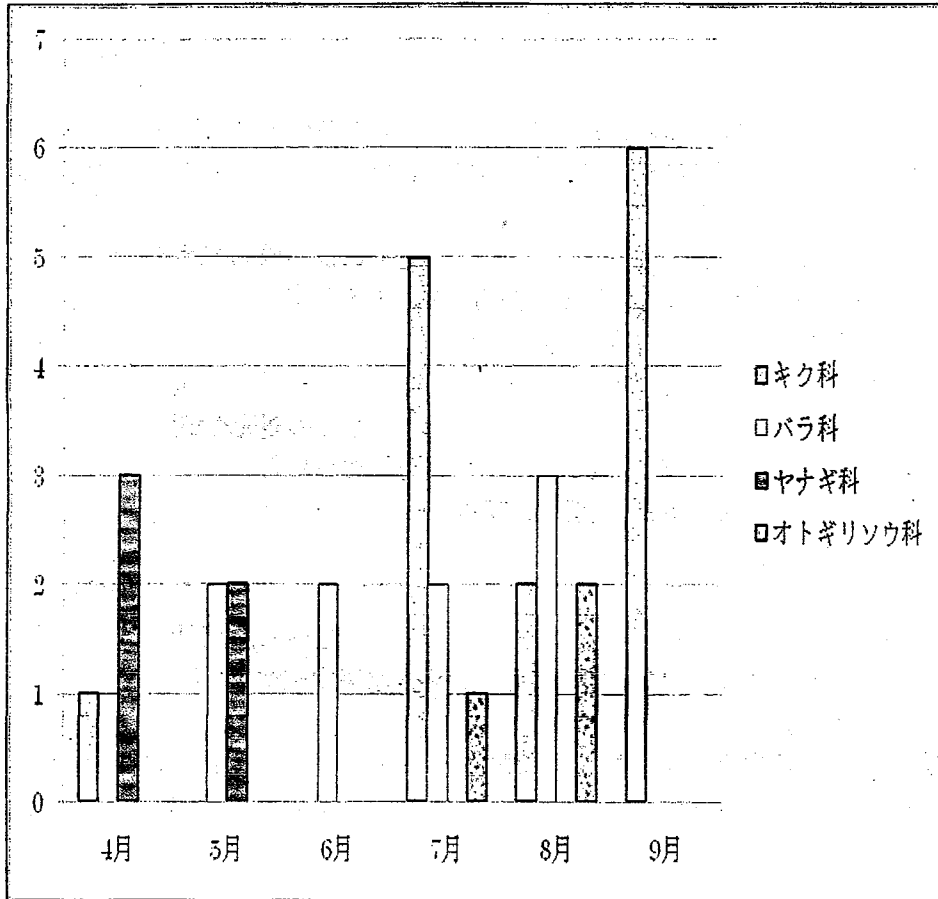


表2. 主な種の月別開花、つぼみ初認数

- ・参考文献
- ・梅沢俊 2007 新北海道の花 北海道大学出版会
- ・佐藤孝夫 2004 新版北海道樹木図鑑 亜璃西社

礼文島の自然から見えてくること

札幌市 道場 優

私のふるさとは、北の島礼文島。豊かな海の幸と自然に恵まれた島。

「高山植物と青い海の絶景が広がる“日本最北の花の島”」と、礼文町の観光のパンフレットは紹介する。

春から秋まで、蒼く澄んだ海のそばに色とりどりの高山植物が咲き乱れる島。春、たくさんの野鳥が子育てに渡って来る。多くの鳥が南へ、あるものは北へと渡る途中にここで一休みしてゆく探鳥のメッカである。珍鳥も時折姿を見せる島。また、名峰利尻富士が海を隔てて望まれる絶好の展望の島でもある。その礼文島の自然と海の幸を求めて、全国からたくさんの観光客が訪れる。

人はそこに住んでいる時は、自分の“ふるさと”のすばらしさを知らずに過ごしているものだ。私もふるさとを離れてみて、ふるさと礼文島のすばらしさを知ったひとりだった。

幼い頃、野山の花を無造作に摘んで、“ままごと遊び”した思い出。クリーム色のレブンアツモリソウの花を踏みつけて、その鳴る音を楽しんだ思い出。あの頃は、あの花が礼文島にしかない極めて珍しい貴重な高山植物であることを、知るよしもなかった。

退職をしてこの数年、ふるさと礼文島でゆっくりと過ごす機会を得て、改めてふるさとの自然のすばらしさと、そこに生きる貴重な生物たちに感動をすること大であった。

礼文島は、四季折々に咲き乱れる高山植物の島として全国的に有名になっているが、本来、高山植物は本州では数千メートル以上の高山地帯にしか咲かない植物である。それが、礼文島では海拔ゼロメートルから最高峰の490メートルの礼文岳まで分布する。これは極めて珍しいことである。

なぜ海拔ゼロメートルから咲くかということ、それは礼文島に高山植物が住み着いた独特の歴史にある。礼文島は165万年前からの地質学上の第四紀に何度も訪れた氷河期に、海面が低下して大陸と陸続きとなったり、島となったりを繰り返してきた。最後の氷河期が終わる約一万年前から、南下してきた寒地植物たちは島となった礼文島に隔離されたという。そして、特に礼文島の西海岸などの暖地の植物が侵入しにくい厳しい場所を選んで生き延びて、現在の高山植物のお花畑をつくったと考えられているという。

礼文の花たちは、遠く氷河期の生き残りだったのである。このことを知った時、私は大いなる驚きと共に、自然の歴史に感動した。

礼文で過ごしてみて知ったことは、その遥か昔の自然の厳しい気象条件が今も

営々とあるということだった。

夏、対馬暖流とリマン寒流がぶつかって発生する海霧が島全体を覆う。霧で太陽の光が射さない日が多く、日中の気温は低くなる。高山植物はその低温と、海霧による水分により生き延びている。

特に冬の厳しさは現在も変わらない。高山植物が多く生息する西海岸は、北西の季節風が吹き、冬の厳しい気候は想像できない程だ。強風が吹き荒れ、突風が降る雪を吹き飛ばし、雪が斜面に積もることさえ出来ない場所。この厳しい気象条件がなければ高山植物は生きられないという。これは、今も高山で生き抜く高山植物と同じ条件だったのである。

礼文を訪れる人たちは、そこに咲く高山植物の花々を見てその美しさに感動し、島内を歩き楽しんでる。しかし、この花々の過酷な生息の条件や、今ここに在る花々の遙かな歴史、そしてその生態まで知らずにいる。

花々を見つめているうちに、私は個々の高山植物の多くの智慧をも知ることとなった。なぜ大きな花を付けるのか？なぜきれいな色の花を咲かせるのか？等々。それが少ない昆虫を呼ぶための智慧であることも知った。

更に、植物の子孫を残すための戦略や進化を知った時の感動は、新しい発見と共に、植物への不思議に新たな興味を持つこととなった。

また、礼文島に多くある固有種の高山植物や、高山植物の傍らに共存して生育する山野の植物にも、興味を注がれた。

そして、この貴重な高山植物を守ろうと、保護活動を続ける人々の存在も知った。礼文島しかない高山植物の盗掘は今も後を絶たない。すでに絶滅したかも知れない植物もある。世界に礼文島しかないレブンアツモリソウは、盗掘を防ぐために、24時間の監視も続けられている。

観光客や花を見る人たちが、高山植物を踏みつけたせいで消失するものも多い。それを防ぐべく遊歩道を整備するボランティアの人たちの働きに頭が下がる。

もし、礼文島を訪れる人たちが、遙か昔から厳しい環境の中で営々と生き続けて今ある高山植物の姿を知り、改めて高山植物の花々の不思議さや、その生態に興味を持ったなら、きっと“新たな眼差し”で礼文島の花々を見つめ直してくれるのではないかと思うのである。

ふるさとを訪れて、礼文島の自然から見てきたことは、礼文島を訪れる人たちに高山植物のことを紹介する活動の大切さということだが、今自分が出来ることは何かというと、それは礼文島以外の多く場所においてもたくさんの人たちに、植物はもちろんのこと、自然の中で生きる多くの生き物のことを、我々が心して伝えていかなければいけないことだと思ったことだった。

TVなどのマスコミで年に幾度か非常識な近所迷惑な飼い主の話や放し飼いで襲われ、怪我や時には死亡のニュースを怒りをもって見聞きしている。

大半は犬のケースであり、全て蓄犬登録違反、狂犬病予防注射違反で指導されもしくは告発されている。世間の人はこのニュースを見聞きしただけでは大半のペットの持ち主はきちんと登録して注射も受けていると思われているはずである。

ところが関係の役所や獣医会の啓蒙にも関らず登録し注射を受けているのは飼われている犬の6割位と思われています。

それでは何故日本で撲滅されてから久しいのに予防注射が必要なのか？

世界中で年間5万5千人が狂犬病で死亡と推定されています。

世界的にもアフリカ、日本以外のアジア、中南米の全てが発生、流行国です。特に日本の隣国であるロシア、中国、朝鮮半島の二つの国も流行国です。更に犬からの感染が多いので「犬」と名が付いているが外国では他の哺乳動物アライグマ、猫、コウモリ、キツネなどから感染することも報告されています。

特に感染国から船員がペットとして持ち込む可能性については昔から指摘されています。でも予防注射を接種すれば完全に予防できる感染症なのです。

登録や予防注射をしない多くの犬の持ち主は自分の家の犬は大人しく人を咬むはずがないので必要がないと思っている方が殆んどです。自分達も法的には同じであるのに非常識な飼い主や人を襲った犬のニュースに怒っているはずです。正に「人の振り見て我が身を直せ」とはよくいったものです。

一般の人はもし咬まれた場合その犬がきちんと登録や注射を行っているかどうか判るはずがないので、飼い主に狂犬病の注射証明書を見せて頂き、なければ役所に届け出ることが大事です。更に登録をしてあれば毎年時期が来ると注射の連絡も頂けるし、マナー等の注意情報もあるはずなのです。またこの登録は人間の住民登録と同じで例えば富良野から札幌へ転居したり他人に譲り渡した際には登録した籍も無料で移動できるのです。登録は一度して置くとその犬の一生ついて回り再登録は必要ないものなのです。

次に何故ペットを野山へ連れ出してはいけないのか？

国立公園、国定公園の登山口付近でペット持込み禁止の記してある注意掲示板を必ず見ることが出来ます。しかし登山ではある人はリード綱を付けて、ある人はリード綱から解放したペット連れの人を見掛けます。愛犬と少しの時間も離れられない、運動のため、自分の安全のためなど色々理由はあるはずですが。しかし少し考えてみれば山ですれ違う人全てが犬好きと限りません。場所によっては人がすれ違うにもやっとの登山道で犬連れの方が対面におれば別の注意

も必要となるのです。又鎖場、梯子場、丸木橋でも犬連れで大騒ぎしている光景も見ることがありますし、人によっては付近に大人しい犬だからと繋いで先に行く方さえあります。逆に後から来た方が戻るケースさえあります。

更に放した状態で連れ回す犬については別の問題もあります。

山には人間が利用する登山道以外に獣道があります。当然通った匂いがするので犬も関心を持ち入り込みます。その獣道に入り込む犬も鹿、キツネ、狸など全て健康とは限りません。当然皮膚病などの犬も動物もいるはずで

す。獣道に入り込んだ犬も動物も感染したり、させたりするのは、それを更に帰ってから他のペットに感染させるのです。次々と感染を拡大させるのです。

それは糞便についても言えることです。動物は異嗜といって他の動物の糞便を食べる習性があります。犬は他の動物の糞便を、他の動物は犬の糞便を食べるのです。皮膚病で起こったと同じ連鎖が次々と起きるのです。

近年エキノコックス感染の肝炎で大学病院で手術される方が毎年10人単位でいると聞いていますがアウトドアをされる方ばかりでないと聞いています。感染経路が説明出来ないケースです。その場合、先に記した感染の連鎖による感染でなければよいと思うばかりです。

北海道の場合、普通の公園でもこうした光景は日常的に目撃されるはずで

す。公園での糞便の後始末や放しての運動禁止の注意掲示板も美観、危険防止以外に以上のような意味のあることが判って頂ければ幸いです。

自分も山で犬連れの登山者と会う機会が結構あるのですが国立公園指導員としてもなかなか駄目と言えず次から気を付けて下さいで済ましていますが、中には2度、3度と出会う方もいます。それらの人は本当の愛犬家でないことだけは間違いないことです。

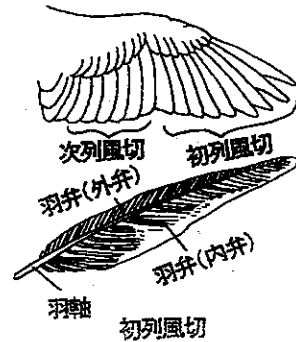
最期にペットとしての猫についてですが平成13年施行のペット条例では病気の感染や交通事故を防ぐため室内で飼育しましょうとなっております外にだす場合もリード綱を付けて犬と同じような形での散歩を推奨しています。

次回は近年増え続ける鹿対策への疑問、特に鹿肉「モミジ肉」の取扱いの疑問について書きたいと思っています。

羽の働きについて

苫小牧市 谷口勇五郎

10月末の観察会はウトナイ湖なので、ハクチョウ・ガン・カモなどが見られる時季です。その時どんな質問が出るかと思いました。オオハクチョウの渡りのルートはどうか、生活の仕方は？などは調べればよいとして、ふと鳥が翼を羽ばたかせて飛ぶのはどういう仕組みか、と出たらどうしようと思いました。鳥が羽ばたいて飛ぶのは当たり前なのですが、飛行機には翼やプロペラ（ジェット）が働いています。



7～8年前の某研修会の時、講師に思い切って鳥が飛ぶしくみについて質問したことがあります。翼の断面を描かれ、翼の上面と下面の長さの違いにより、空気の流れが異なり上向き力（揚力）が働くという説明でした。本当は前進するしくみを知りたかったのです。その後、本を多少調べたものはっきりしないままでした。今迄の観察会で誰もそんな質問はしませんでしたし、今回もないだろうと思いましたが、多少心配になってきました。

10月20日頃、某所の探鳥会に参加し、リーダーに羽を見せて、恐る恐る聞いて見ました。唐突な質問に羽を上下に動かしながら、頭をひねり、要領を得ません。野鳥関係の某会に問い合わせると、書籍のコピーと丁寧なアドバイスをもらいました。それも参考に、自分の持つ本の関係する部分を繰り返し読みました。翼を持ち上げるときは、羽軸の根元はしっかりと肉で押さえられていても、羽軸の左右で幅が違い、幅広い方（内弁）が羽の進む方向と反対側になるので、初列風切の羽は、となり、風切羽の間に隙間を生じ、空気を下方へ逃がします（風切羽を指で挟み上下すると分かります）。翼を打ち下ろすときは、初列風切の一枚一枚が、斜めのように羽軸がねじれて、空気を後方に押し、前進する力が得られるのかなと思いました。ところが羽の少なくとも基半部は重なっているのです。それは出来そうにありませんが、先端部のほうは可能かも知れません。翼の先端（初列風切）の部分が全体としてねじれ、前下方を向き（左右どちらも）、打ち下ろされて、推進力が得られるのかなとも思いました。カラスやハクチョウが飛ぶのを見てもそのようには見えません。11月1日、TV「ダーウインが来た」のビデオでミサゴの飛ぶスローモーションもあったので少しは解るかなと思った時には、ビデオに別の番組を入れた後でした。推進力を得るための羽（翼）の働くしくみについて、解る方は教えて下さい。

2009年度 新しく出あった植物から思うままに

～ 蔓に驚かされ 蔓に惑わされ 蔓に魅せられて ～

平取町 川村 桂介

今シーズンは、思いの外いろいろな新しい植物に出会うことができた。在来種では最近その数が段々少なくなっている希少種や、帰化植物では北海道でもあまり報告されていないように思われるものなど44種を確認することができた。

<きく科>ニガナ、シロバナニガナ、エゾムカシヨモギ <あかね科>アカネムグラ <おおぼこ科>トウオオバコ、セイヨウオオバコ(帰化) <ごまのはぐさ科>ヒキヨモギ、アメリカアゼナ(帰化) <まめ科>モメンズル <あぶらな科>ミチタネツケバナ(帰化)、グンバイナズナ(帰化) <きんぼうげ科>ケキツネノボタン <せり科>タニミツバ <あかばな科>チョウジタデ <あかざ科>ゴウシュウアリタソウ(帰化) <たで科>サナエタデ、ツルタデ(帰化) <らん科>ジガバチソウ <いちやくそう科>シャクジョウソウ <ゆり科>ヒメニラ、ノビル <いぐさ科>カラフトハナビゼキショウ(帰化) <いね科>オオクサキビ(帰化)、ナギナタガヤ(帰化)、ハガワリトボシガラ(帰化)、ヒロハノハネガヤ <かやつりぐさ科>コホタルイ、マルホハリイ、ホソバヒカゲスゲ、オオアゼスゲ、アイバソウ、ヤマアゼスゲ、アズマナルコ、ツルアブラガヤ、アメリカヤガミスゲ(帰化)、カタガワヤガミスゲ(帰化) <やまのいも科>オニドコロ <いわでんだ科>イワウサギシダ、ツルデンダ <とくさ科>イヌスギナ、ヒメドクサ、ミズドクサ <ひかげのかずら科>ヒカゲノカズラ・マンネンスギ

以下は、これらの植物の中から特に印象に残ったものを取り上げ報告する。

カヤツリグサ科の植物

二世宇の沢・・・アズマナルコ、ミヤマアゼスゲ(谷地坊主)

二風谷ダム湖の砂泥地・・・ツルアブラガヤ、コホタルイ(群生)、マルホハリイ(群生)、カタガワヤガミスゲ(稀)

荷負の耕作放棄地・・・アメリカヤガミスゲ(群生)

その他・・・ホソバヒカゲスゲ、アイバソウ・オオアゼスゲ(谷地坊主)、オオチャガヤツリ(稀)

◎ アメリカヤガミスゲとカタガワヤガミスゲ

平凡社の帰化植物図鑑では、北海道にも何種類かのヤガミスゲの仲間が帰化していることになっている。以前、荷負の耕作放棄地で小穂の少ないヤガミスゲを見ていたので、もしかしたらと思い確かめに行ったのであるが、それは思ったとおり外来種でアメリカヤガミスゲであった。それ以来、ヤガミスゲに出合った時には注

意して見ていたのであるが、その甲斐あってカタガワヤガミスゲも確認することができた。在来のヤガミスゲは、背丈は40~50cm、花序の長さは1~4cm、小穂は15~20個でそれを上方に向かって隙間なく密に付け、果胞は熟すると外側に反り返る。それに対してアメリカヤガミスゲは、背丈は60~120cmと高く、花序の長さは1.5~3cmで小穂は3~7個と非常に少ない。しかも下方の小穂はやや離れて付き、果胞は熟しても外側に反り返らない。北アメリカ原産。

カタガワヤガミスゲはアメリカヤガミスゲに似るが、果胞の翼がそれよりやや広く、最下の苞葉が花序より著しく長いことで区別できる。北アメリカ西部原産。

◎ コホタルイとツルアブラガヤ

二風谷ダム湖の右岸（国道側の対岸）の遊歩道を調査していた時、ダム湖の中の砂泥地にイガオナモミの群生しているのが見えたのでそこへ下りてみた。砂泥地はさっと見渡した感じでは、岸辺の砂地にイガオナモミが、中ほどから水辺に向かう泥地にはサンカクイやイヌスギナ、ミズドクサ、サジオモダカ、ツルヨシ、アブラガヤ、タチコウガイゼキショウ等が混生する比較的単調に思える植物相であった。しかしこれらの他にどのような植物が入り込んでいるのか気になり、せっかくの機会でもあるので詳しく調べてみることにした。（ここでは、詳しい観察は省略する）

砂泥地は、雨水が回りの森や林や田畑等から削りながら運んできた肥沃な表土からできている。そのせいだろうかここに生えている植物たちは大型のものが多く、タチコウガイゼキショウは茎の高さが60~70cmもあり、サンカクイは1.5m、フトイにあっては茎の太さが10mm以上、高さは優に2mを超えていて立派な小穂を弓形に垂らしていた。それらの植物の中に、ホタルイに似るがホタルイにしては少し小型のものが目に付いた。花穂はまだ熟していなかったこともあり、初めのうちはホタルイの遅れて出てきたものとばかり思っていたのである。しかし、それが同じ未熟な生育状態であちこちに群生して見られたので、ひょっとしたら別なものかもしれないと思い持ち帰ったのである。思い通りコホタルイであった。

コホタルイは、ホタルイと比べて全体的に少し小型で、茎は細くて背丈もやや低く、果実の長さが1.2~1.5mm（ホタルイは2~2.5mm）、苞は7~15cm（ホタルイは3~7cm）で柱頭は2個（ホタルイは3個）である。背丈が低い上に苞が長いので、花序はホタルイよりも幾分低いところに付ける。平凡社の図鑑では、本州中北部や北海道に稀に生え朝鮮・中国・ウスリーに分布するとなっている。

砂泥地を歩き回るうちに、背丈が1.5mもある大型の植物で、アブラガヤに似るが茎から四方八方に蔓を伸ばし新苗を出している植物にでくわしたのである。「おお！！これは？」と思わず驚きの声を出さずにはいられなかった。まるでギアナ高地か何処か（勿論行ったこともない空想の世界であるが）に迷いこんだような錯覚を覚えたのである。このように蔓を出すカヤツリグサの仲間が日本在来の植物

の中にあるとは全然思ってもいなかったことや、蔓を出している様子がいかにもエキゾチックなものに思えたことで、これはきっと外来種だろうと早合点してしまった。そこで早速帰化植物図鑑をめくってみたところ、挿し絵の写真がこの植物にそっくりで、蔓を出して芽生するとあるセフリアブラガヤに行きついたのである。しかし、花序が枯れていて枝もほとんど無い状態だったので同定するときに決め手となる肝心の小穂がみあたらず、そこまで確かめることはできなかった。小穂の鱗片やそう果等については来年確認することにして、一応セフリアブラガヤのつもりでいたのである。ところがいくつか作った標本の一つに、枯れた花序の枝の先に小穂が何個かへばり付いているものが出てきたのである。そう果の刺針状花被片を調べたところ、刺針の長さはそう果の3~4倍もありセフリアブラガヤではないことが判明(セフリアブラガヤは、刺針は無い、まれにそう果の1/3以下の長さのものがある)。しかもその刺針は著しく屈曲していて先端には刺状突起があったのである。ということでこの植物は在来種でクロアブラガヤの仲間のツルアブラガヤであった。次の年を待たずして一件落着とあいなったのである。このような植物が、北海道にもずっと昔から自生していたのかと思うと、初めてこの植物に出くわした時より一層感動を覚えたのである。

ツルアブラガヤとの出会いは、このように驚きと興奮とで心ときめくものであった。北海道・本州北部に生え、朝鮮・樺太・シベリア・ヨーロッパに分布する。

◎ オオチャガヤツリ

オオチャガヤツリは、小穂の鱗片の中肋が突起状になって外曲し、小軸に翼があるなどチャガヤツリ非常に似ている。しかし、チャガヤツリが茎の高さや小穂の長さや小穂に付ける花の数がそれぞれ4~10cm、7~12mm、10~20個なのに対して、オオチャガヤツリはそれぞれ10~15cm、20~25mm、20~30数個にもなり、チャガヤツリに比べて小穂が著しく長い。杉本順一の日本草本植物総検索誌によると、特に小穂が長いものをオオチャガヤツリというところがある。また保育社の図鑑には、カヤツリグサとチャガヤツリとの交配種とあるが、これが生えていた回りにはカヤツリグサは無い(北海道には自生していない)ので採集した辺りで交配して生じたものではなくオオチャガヤツリの種が持ち込まれ発芽して生育したものと思われる。九州や本州でも稀という。

イグサ科

◎ カラフトハナビゼキショウ

二風谷ダム湖左岸の砂泥地を調べるのに、国道側からダムの中へ下りて行けるところを探していた時、偶然というか運良くでくわしたのがカラフトハナビゼキショウである。見た感じはタチコウガイゼキショウに非常に似ているのであるが、それが何と蔓を伸ばして生えていたのである。そこは凹地になっていて、降り続いた長

雨で水たまりができたのであろうか、その水溜りの中に花序を倒し、節のところから根と芽を出していたのである。またもや驚きの出会いであった。イグサの仲間にも蔓を出すものがはたしてあったかなあと思い図鑑をめくってみたのであるが、それらしいものは挿し絵の中には見当らなかった。それで、まだ図鑑にも出ていない未報告のものとはばかり思い込み高橋誼先生に見てもらったのであるが、2・3日してからカラフトハナビゼキショウとの回答があった。平凡社の図鑑に出ていると言われ早速調べたところ、挿し絵なしで記載されていて、根茎から長い匍匐枝を出し節から発根して殖え、また倒れた茎の節からも発根し新苗を付けるとあった。

カラフトハナビゼキショウの群生しているところは、普段は水気の少ない草地である。オオアワダチソウや、クサイ、ノラニンジン、ヤマアワ、ツルヨシ、マルバヤハズソウシ、ナワシロイチゴ等が見られ、水のたまりやすい凹地には、アブラガヤ、アカバナ、コシロネ、ヒメクグ、オオカナダオトギリ、ヒメジソ、アメリカセンドングサ等も生えていて、それらと混ざりあって生育しているのである。

凹地でない乾いたところに生えているものは、ほとんど蔓を出していない（探してみたが一つも見当らなかった）ので、水がある程度長い間たまっている環境のもとでないと蔓は出さないように思われる。もし、水たまりがなかったら、きっと蔓を出さないで生育しているだろうから、タチコウガイゼキショウが群生しているなあと思うぐらいで注意を払わず見逃していたことであろう。たとえ蔓を出していないものを持ち帰って調べたところで、それをカラフトハナビゼキショウと特定することは難しいように思うのである。カラフトハナビゼキショウもタチコウガイゼキショウも茎の高さや花序の様子等がよく似ていて、葉もともに円筒状で単管質、雄蕊も両種とも6個である。大きな違いは蔓を出すか出さないかなのである。

そういう訳で、今回蔓を伸ばしているものに出合えたことは、これまた幸運であった。アジア北部・北アメリカ・ヨーロッパ原産。

イネ科

イネ科の植物には、オオクサキビとナギナタガヤ、ハガワリトボシガラ、ヒロハノハネガヤの4種に出会うことができた。

◎ オオクサキビとナギナタガヤとハガワリトボシガラ

どれも帰化植物である。オオクサキビは額平川の堤防で見られる。在来のヌカキビは花序の枝が広く開き、小穂は下向きに垂れていて、柄に小刺はない。オオクサキビの方は花序の枝は斜上し、小穂は枝に圧着し、柄に小刺があることで区別できる。北アメリカ原産である。

ナギナタガヤは、紫雲古津の稲の苗畑の周辺に群生している。苗畑に撒く有機肥料の中にも種が混ざり込んで入ってきたものだろうか。平取町の他の地域ではま

だ見ていないが徐々に広がりつつある。

ナギナタガヤは、稈は細く叢生し、基部近くでは節で屈曲し多く分枝する。葉も細く花序は枝が中軸に圧着して細長くなり、上部は小穂が穂状につき長刀状に見える。図鑑では、本州から九州に帰化とある。北海道からの報告はまだないのだろうか。地中海地方～西アジア原産である。

ハガワリトボシガラはオオウシノケグサによく似るが、花序などが少し大型で、上部につく葉は無花茎の根生葉より明らかに幅が広く大型である。葉の表面には細毛が著しく、子房の先端に軟毛のあることが決め手である。本州・四国に稀に見られるとある。義経公園第1展望台に向かう遊歩道沿いで見られるが少ない。ヨーロッパ中南部～西アジア原産である。

◎ ヒロハノハネガヤ

茎は直立して高さ60～100cmになり、葉は灰緑色。円錐花序は線形で細長く直立する。ハネガヤは花序の枝が細長く開出して半輪生するが、ヒロハノハネガヤは花序の枝が開出せず、花軸にぴったり接して双生し、芒(のげ)はハネガヤより太くて長く、内側に2個の溝がある。絶滅危惧種ではないが、全国的に少ない稀な草のようである。看々川の上流部に見られる。

その他の植物

◎ ケキツネノボタン (キンボウゲ科)

平取町で見られるキツネノボタンは、ほとんどが茎に斜上毛があるヤマキツネノボタンである。毛のないいわゆるキツネノボタンは少なくあまり見られない。これらの植物によく似ているが、茎から葉柄、葉、萼まで全体に荒い多細胞の毛を密生するケキツネノボタンがアベツの沢沿いの田んぼの縁に群生している。図鑑には、ケキツネノボタンは本州から琉球に見られ暖帯から亜熱帯に分布すると記載されている。そのような南方系の植物がアベツの沢沿いで見られるのである。田んぼの縁に多く生えていることと、アベツの沢に集中し他の所ではあまり見られないことなどからこの地域の水田農家が施した何らかの農作業に係わって紛れ込んできたものと思われる。あるいは車が種を運んできて、落していった場所が、たまたま生育に適した環境の水田だったので、その好条件の下で殖えていったものかもしれない。

アベツ川と沙流川との合流点から少し下流の、条件の悪い乾いた砂礫地でも見られるので、この平取町の環境にも適応し徐々に殖えていくように思われる。

ケキツネノボタンは、植物全体に開出した荒い多細胞の毛を密生するだけでなく、そう果は周囲に明らかな縁取りがあり、花柱は先のみ少し曲がる。一方キツネノボタンやヤマキツネノボタンは、そう果の上部だけに縁取りがあり、花柱の先は細く

伸びて著しく曲がることで区別できる。

◎ ミチタネツケバナ (アブラナ科)

ちょっと見た感じはシロイヌナズナやミヤマハタザオに似る。茎は直立し約30cmの高さがあり、無毛である。根生葉はロゼットをつくり羽状に全裂し、側裂片は3~5対で柄があり、頂裂片は側裂片よりやや大きく花時にも残存する。莖葉は普通0~2個であるが5~6個付けるものもある。裂片は、根生葉のそれより細くなる。花は白色で、長角果は扁平で直立し長さは1~2.5cmである。二風谷ダムサイドにある沙流川資料館周辺で見られる。ヨーロッパ原産である。

◎ ヒキヨモギやモメンヅルなど

ヒキヨモギ(ゴマノハグサ科)とモメンヅル(マメ科)は、昭和40年代にこの平取町で生育しているのを確認していたが、ここしばらく見ていなかった。それを今年別な場所で見つけることができた。ヒキヨモギは自然愛好会の活動日にファミリーランドで、モメンヅルは紫雲古津の林の中でそれぞれ見つけたのである。管内的にも最近少なくなってきたので、再び確認できて嬉しく思った次第である。

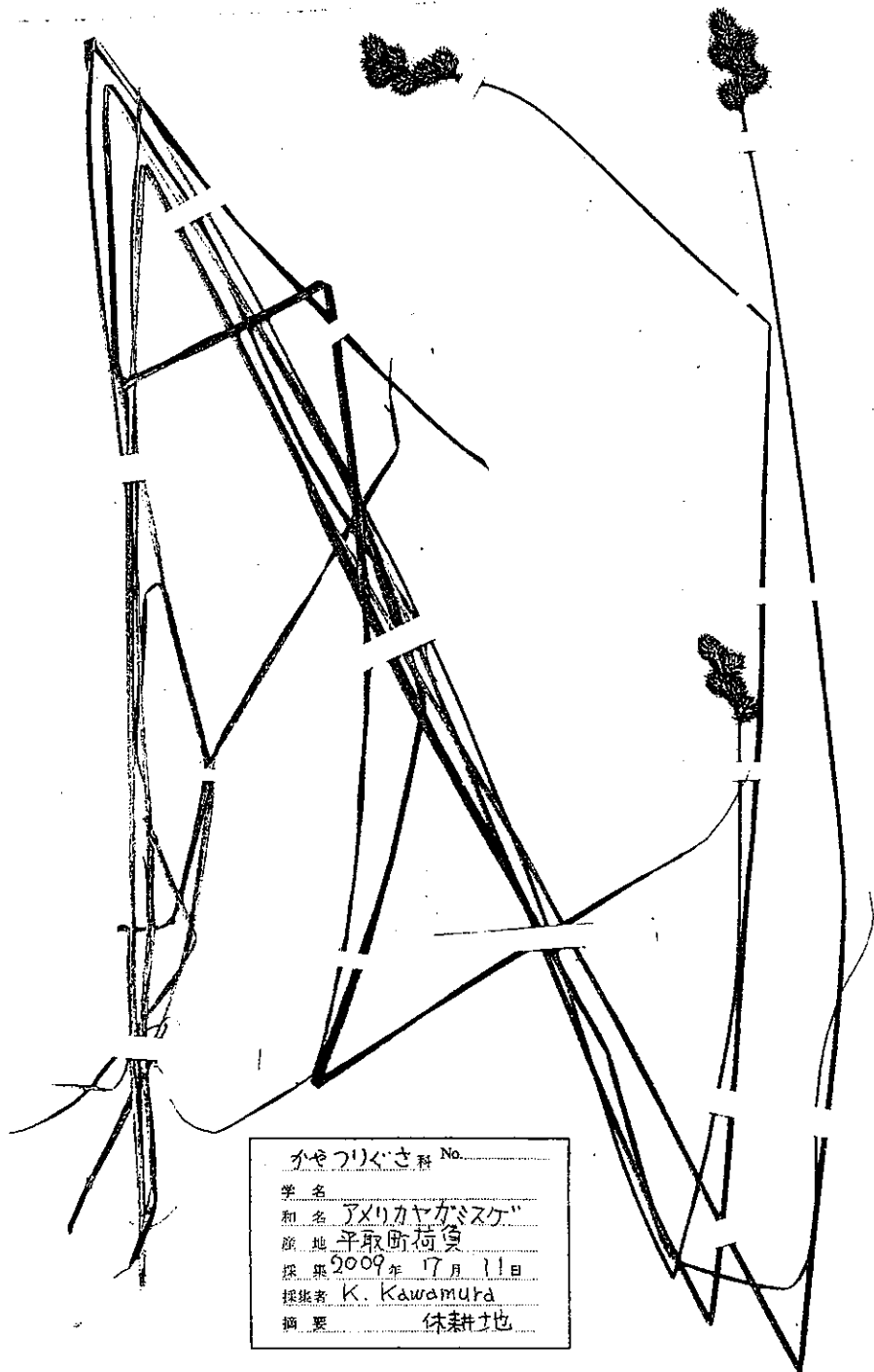
チョウジタデ(アカバナ科)は、二風谷ダムの中の砂泥地にサンカクイやイヌスギナ、ミズドクサ等と混ざりあってあちこちに生えていたのであるが、ハゲイトウのように真っ赤に紅葉していてその赤が陽に映えとても綺麗であった。

エゾムカシヨモギ(キク科)、タニミツバ(セリ科)、ヒロハノハネガヤ(イネ科)等は生育地に限られ、どこでも見られるものではないが、それらと出合ったのも幸運であった。タニミツバは、森と海を語る会の活動日に、新冠から東川に抜ける町道沿いの林の中で見つけたものである。カノツメソウに似ているが、花序の雰囲気はちょっと違うように思えたので持ち帰り調べてみたところタニミツバであった。タニミツバはカノツメソウと比べて花序の花柄はまばら(カノツメソウは小形花序が8個あるが、タニミツバは多く(5個)で細く、しかも茎は中空である。そこへ後日再び行ってみたのであるが、タニミツバを以外と数多く見ることができた。カノツメソウはカノツメソウ属で、タニミツバはヌマゼリ属である。

今年の活動での一番の収穫は、何とんでもなく蔓を出す植物に多く出会うことができたことである。カラフトハナビゼキショウ、ツルアブラガヤ、ツルタデ、オニドコロ、モメンヅル、それに小型のハイキンボウゲ(湿地に生える大型のハイキンボウゲと違い、毛が多く、茎の色も濃い褐色で小型のもので外来種と思われる)等である。その他、多くの希少種や外来種とも出会うことができ、今シーズンは驚きや感動をいっぱい味わうことのできた収穫の多い1年であった。

(2009.11.17)

アメリカヤガミスゲ (原産地 北アメリカ)
Carex scoparia



かやぶくさ科 No. _____
学名 _____
和名 アメリカヤガミスゲ
産地 平取町荷負
採集 2009年 17月 11日
採集者 K. Kawamura
摘要 休耕地

ツルアブラガヤ (北海道・本州北部・朝鮮・樺太・シベリア・欧州)
Scirpus radicans

①

《 花序のある枝 》

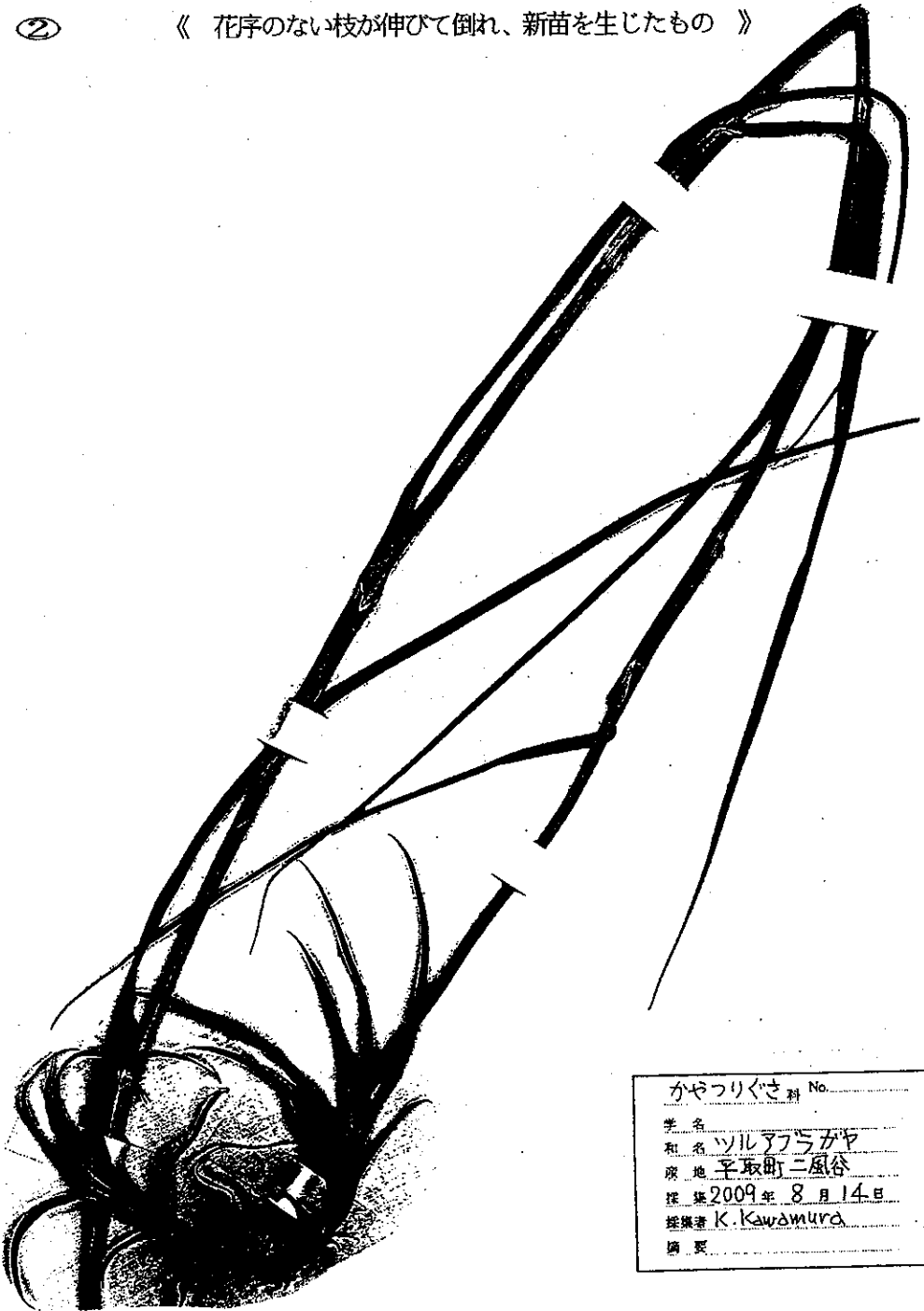


ツルアブラガヤ

Scirpus radicans

②

《 花序のない枝が伸びて倒れ、新苗を生じたもの 》



かやつりぐさ科 No. _____

学名

和名 ツルアブラガヤ

産地

平取町二風谷

採集

2009年8月14日

採集者

K. Kawamura

備考

前田一步園賞 北原 武氏 受賞

北海道の自然環境の保全とその適正な利用に関する分野で活躍している団体、個人で優れた業績を残した事に与えられる、今年度の前田一步園賞に、小樽支部代表の北原武氏が受賞されました。

北原氏はボラレン小樽支部代表として、また小樽市野草愛好会の代表として、観察会、植生調査を精力的に行ってきました。植生調査から外来種の野草が植え続けている状況を見て、今のうちに記録を残すことに心がけ、標本作りに励み平成21年7月現在、1200種の標本を作製しています。そして毎年、この標本の展示会を開催しています。

このような業績が認められ受賞されたわけですが、ボラレンの会としても大変喜ばしいことです。

昨年、11月17日に、札幌市のホテルホールスターにおいて授賞式があり、小樽市の関係者の皆さん、ボラレンの関係者が招かれ、式に参列させていただきましたので、ご報告いたします。

第27回 前田一步園賞表彰式



小樽の北原さんと
ヒグマの会が受賞

前田一步園賞

【阿寒湖温泉】前田一步園財団(前田三郎理事長)は、道内で自然保護に貢献した個人や団体に贈る本年度の前田一步園賞に、小樽市の北原武さん(77)と、市民団体「ヒグマの会」(金川弘司会長、事務局・札幌)を選出した。11月17日に札幌で表彰式を開く。

北原さんは、小樽野草愛好会会長や道ボラレンティアレンジャー協議会小樽支部代表を務める。貴重な高山植物など約1200種の植物標本を製作、展示会などを開催している。

ヒグマの会は、研究者やハンター、学生などさまざまな会員で構成。ヒグマの保護や管理に関する普及啓発などをを行っている。

流氷

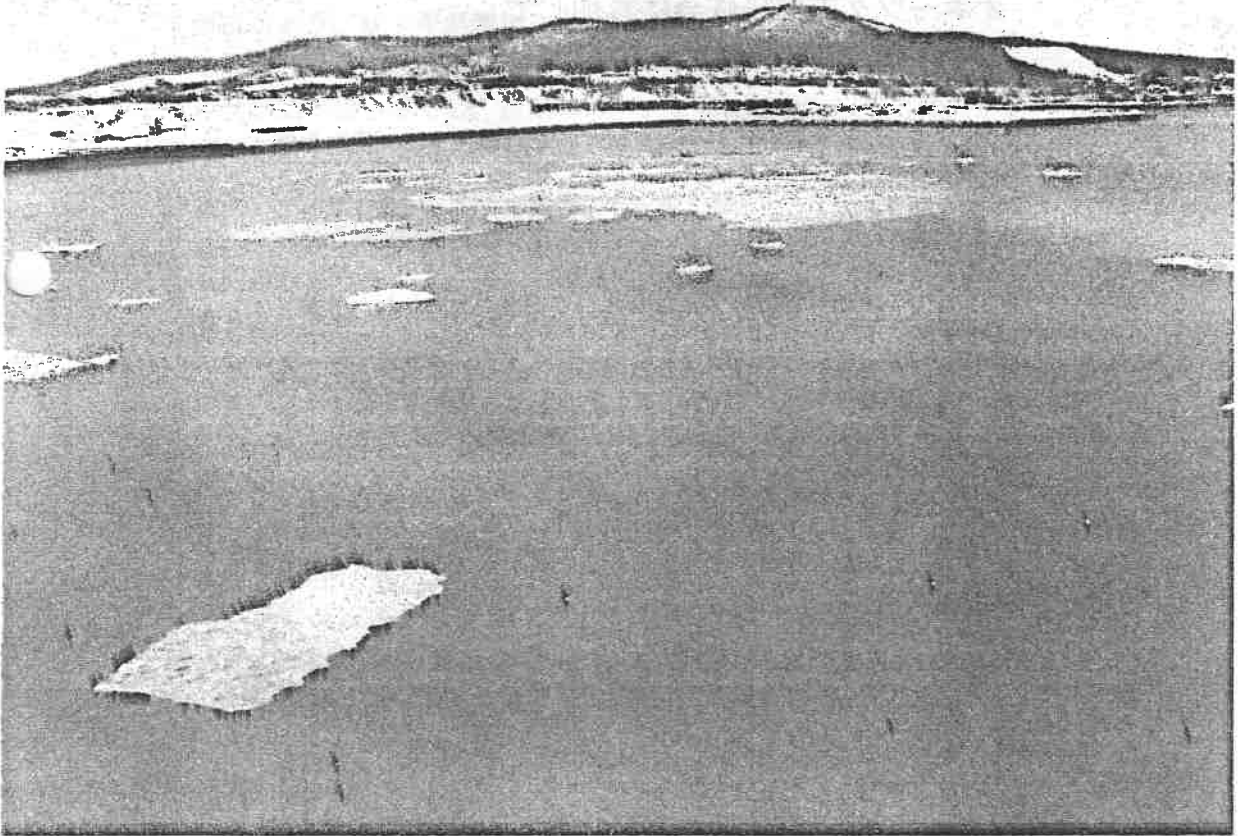
平成22年1月1日発行

第11号

北海道ボランティアレンジャー協議会

オホーツク支部発行

発行責任者 支部長 和泉 勇



年頭所感

(山彦の滝へ向かう参加者)

昨年9月12日(土)~13(日)の2日間 当オホーツク支部の「秋季研修会」を丸瀬布上武利にある多目的施設を拠点に、札幌・富良野方面から12名の参加を得、支部参加5名の計17名にて開催いたしました。

現地対応した支部遠征地区皆さん大変お疲れ様でした<(_)>なお今回の研修に参加された札幌の熊野美子さんより特別寄稿を頂戴しましたのでご紹介致します。事務局



流氷観光船ガリンコ号Ⅱより紋別市方面を望む (21.03.25)

オホーツク支部研修会に参加して

熊野美子

研修会の1日目は「丸瀬布いこいの森」にて行われ隣接する「昆虫生態館」で町教委の小山さんより色々の説明がありました。

この館は空き家をボランティアで改造し展示から説明まですべておこなっていたそうです。環境庁により「ふるさといきものの里」にえらばれ現在にいたっていると伺いました。

町のシンボルとしてのオオイチモンジを始めとして各種の昆虫がわかり易く展示されております。

沖縄の島にいるスジグロカバマダラは成長の過程をそれぞれのケース別に展示されていて皆様の熱意が伝わってきました。お世話はさぞ大変でしょう。夜はライトによる冬の知床に自然 武利岳の高山植物の数々は花好きにとっては嬉しい画像でした。

またこの夜の宿となる会館の玄関に丸々としたカブトムシが飛び込んできてこの地域の森の豊かさを実感しました。

夕食のパーベキューは新鮮な地元の食材と暖かい人情のもてなしで大変ありがたく美味しい会食でした。

2日目は佐野さんの案内による観察会でした。まずはオオイチモンジの食草であるドロノキでこの卵から蝶までの様子の説明とともに観察すると葉っぱに食痕がありました。

キハダの説明ではミカン科であること、よい材木であること、葉として内皮が使われることなどで勉強になりました。

山彦の滝までは足元の植物等の説明で参加者を上手に引き込み佐野さんの話し方でこちらもやさしい気持ちになれました。自然のおもしろさと感動をいかに伝えるべきかのひとつの見本のような感じでした。

厳冬の山彦の滝観察会が行われているそうですが楽しい暖かい観察会なのだろうと思いました。

オホーツク支部は海あり山あり滝ありの広い地区で羨ましいくらいの自然に囲まれていて何度でも訪れてみたいと思いました。

和泉支部長さんはじめ皆様に大変お世話になりました。有難うございました。

最近の抗老化事情（続）

小栗法詔



その7

2003年にガレンテ(アメリカ)は酵母菌、線虫の遺伝子を使って老化の研究をしているときに、長寿遺伝子サーツ2を特定した。

サーツ2遺伝子の役割は、オーケストラの指揮者のように人の各臓器の活動のバランスを取ったり、ミトコンドリアが生み出す有害な酸化物によって破壊された細胞を修復する蛋白質を活性化し、生命維持に必要なエネルギー量の調節などして、老化のコントロールをする抗老化の働きをすることとされている。

この遺伝子は普段は奥の方に控えていて、腹7分の状態、ビタミンE（馬鈴薯・南瓜等に多く含む）の摂取、程よい運動、脳を使ったとき等によりスイッチオンされて活動を開始するが、ブロッコリーはこの活動をより活発にするとされている。

ニュースで話題になる遭難とか飢餓状態からの奇跡の生還と言われる事件の時に、この長寿遺伝子の働きが大きく影響したのでないかと言われている。

その8

今国民2人に1人がガンに罹っていると言われ、これが普通の集団検診では発見できないガンもあるそうで、生活習慣病と言う人もおりますが厚労省の09年度の人口動態統計の推計によると、死亡数114万4千人の30%がガン・16%が心臓病 12%が脳卒中とされ、厚労省が8万8千人12年間の追跡調査によりますと、生活を楽しんでいる意識が高いほど死亡リスクが低いと言う報告があり、自分なりの生活を楽しむ方法を見出すことも大切と思う。

その9

予防ではガンに効くワクチンが先進医療として認可されている。



これは自分自身の免疫細胞（樹状細胞）を利用してガン細胞のみを攻撃します。

これは成分採血で採取した細胞から樹状細胞を培養し、ガンの特徴（抗原）を覚え込ませて体に投与します。

投与した樹状細胞が体内のリンパ球にガンを攻撃する指令を出すため、ガンだけを狙って攻撃できるというわけです。

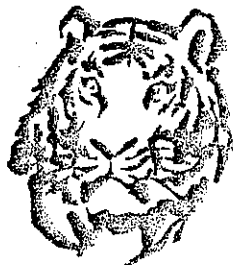
ガン予防の食事では注意することは ①細胞を傷める塩分を少なくし、野菜を多く摂取する。 ②動物蛋白を多く摂ると、大腸の粘膜を荒らし肝臓の負担を大きくするので程々にし、蛋白質はできるだけ魚や鶏肉・豆腐など植物性蛋白質を摂取するようにする。 ③腸内環境を良くする善玉菌を増やすヨーグルト等の発酵食品を多く摂るようにする。 ④調理で使う油は酸化しにくい植物性のオリーブ油やゴマ油を積極的に取り入れよう。

その 10

意識的に笑うことで、ガン細胞などの異物を発見し退治するために活動するリンパ球が活性化され、心身がリラックスすることで自律神経の働きが安定化し、ストレスホルモンの分泌が減少するため結果的に免疫系が活性化され、ガン予防に有効と考えられている。

生・老・病・死にどう立ち向かうか何時も意識し、まあまあ、そこそこに楽しく健康な生活を送り、最期には甘えて世話になれる人間関係を作っておくことが大切と思う。

明はまの自世



晩秋の森観察会 (志文別線をハイキングします)

平成21年11月3日 10:00~14:30

大沢口からエゾユズリハコース、志文別線、森林の家(昼食)、もみじコース、基線、中央線を経て大沢口へ戻ります。

(約8km)

ホオノキやキタコブシの樹木はすっかり葉が落ち、果実や冬芽になっている。ヤチダモは雌の木はたくさんの果実をつけている。雌雄異株の樹木はこの時期、雌、雄の確認ができる。ハンノキなどは紅葉しないで緑色の葉をつけている。シダ植物を見るとこの時期、樹木の葉が落ちるので着生シダのイオモダカやホテイシダを発見できる。シダ植物の冬緑性のシダであるエゾフユノハナワラビ、オジャグジデンドラなどが胞子を発散する時期でもあり、大きな葉をからしたイヌガンソクやクサソテツの胞子葉(ガンソク)も目立つ存在になっている。

森林の家周辺には、林業試験場の試験林として、スギ、ヒノキ、トチノキ、ブナをはじめとして、様々な樹木が試験植栽されていて、樹齢が約100年近くになるものもある。営林署の管理棟付近には100年前造成された樹木園が存在している。

※野幌森林公園は明治41年(1908)に森林試験場が開設され、野幌国有林3426haを付属試験林として森林の育成、経営を中心として試験研究が行われる。野幌林業試験場(北海道林業試験場)は、その後、昭和2年(1927)野幌伊達屋敷(林木育種場)に、昭和26年(1951)には、札幌市豊平に移転、更に昭和47年には札幌市羊が丘に移転(現在、独立行政法人森林総合研究所北海道支所となっている)。

北海道ボランティア・レンジャー協議会

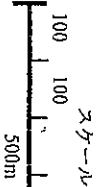
連絡先事務局 〒004-0865札幌市清田区北野5条5丁目6-5

電話・FAX 011-881-4090 春日順雄

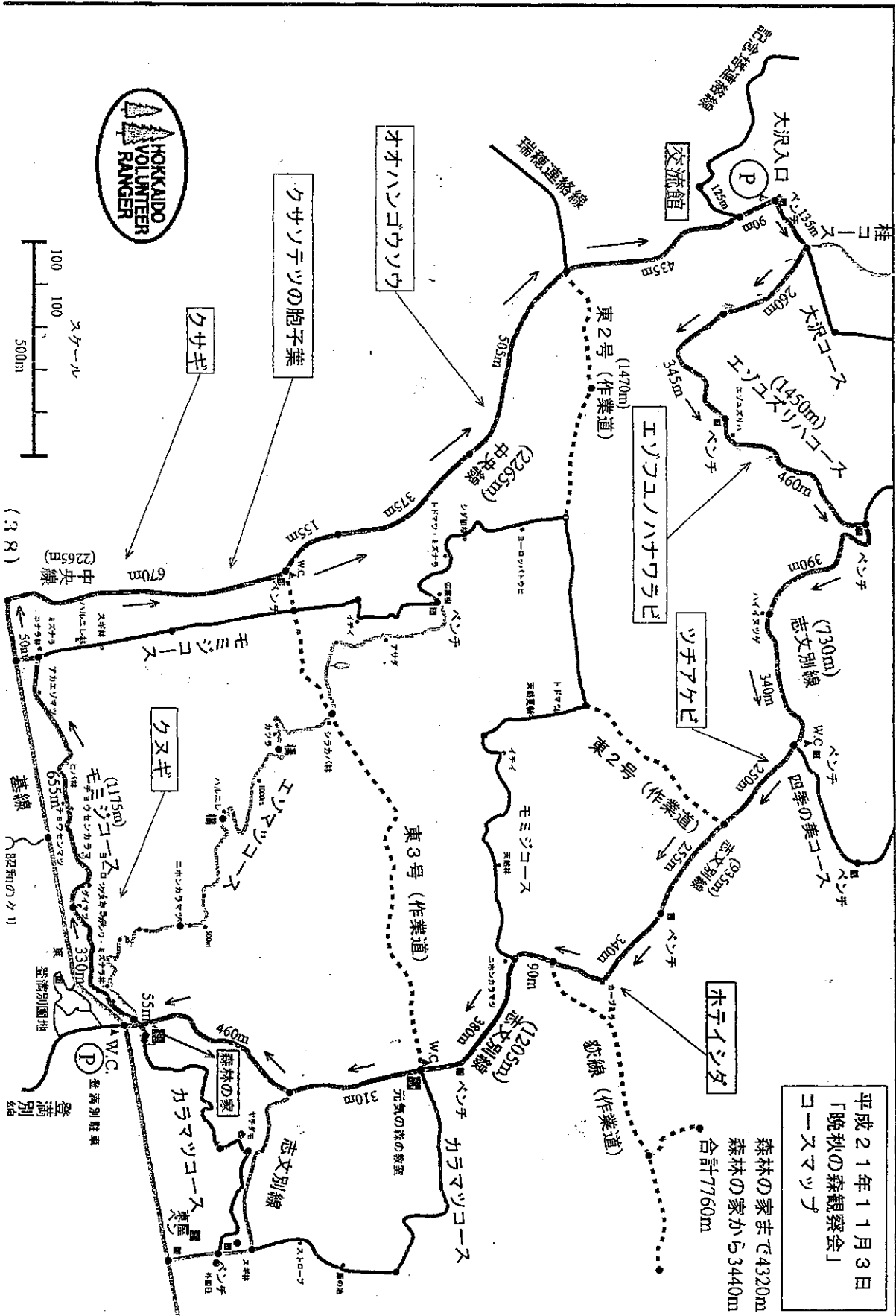
木本リスト
アオダモ
アカイタヤ
アカエゾマツ
アサダ
アズキナシ
イタヤカエデ
イチイ
イワガラミ
ウダイカンバ
ウラジロモミ
エゾアジサイ
エゾノバツコヤナギ
エゾユズリハ
エゾマツ
オオカメノキ
オヒヨウ
カシワ
カツラ
カラマツ
キタコブシ
キハダ
グイマツ
クリ
クヌギ
ケヤマハンノキ
コブニレ
コシアブラ
サルナシ
サワシバ
シウリザクラ

シナノキ
シラカンバ
タラノキ
チヨウセンゴヨウ
ツタウルシ
ツリバナ
ツルアジサイ
ツルウメモドリ
ツルキシミ
ヨーロッパトウヒ
トドマツ
ナナカマド
ナニワズ
ノリウツギ
ハウチワカエデ
ハウウンネク
ハルニレ
ハンノキ
ヒバ
フッキソウ
ホオノキ
マユミ
ミズキ
ミズナラ
ミツバウツギ
ミヤマガマズミ
ヤチダモ
ヤドリギ
ヤマブドウ
ヤマグワ

草本リスト
エゾトリカブト
コヤブタバコ
ノッポロガンクビソウ
エゾゴマナ
オオバセンキユウ
オオバコ
オオウバユリ
キンミズヒキ
ゲンノシヨウコ
サラシナシヨウマ
ノブキ
ハナタデ
ホウチヤクソウ
マムシグサ
ミゾソバ
ヨツバヒヨドリ
シダ植物
イヌガンソク(胞子葉)
エゾフユノハナワラビ
オシダ
オジャグジデンドラ
クサソテツ(胞子葉)
コタニワタリ
サトメシダ
シシガシラ
ジユウモンジシダ
トラノオシダ
ホテイシダ
ホソバナヲライシダ



(3R)



平成21年11月3日
「晩秋の森観察会」
コースマップ
森林の家まで4320m
森林の家から3440m
合計7760m

平成21年度第3回役員会

平成22年1月21日(木) 18:30～ 於:エルプラザ会議コーナー

出席:田村・佐藤・五十嵐・春日・三崎・橋場・小林・伊藤・今村・内山・熊野・菅・田中・中林・室野・高松

I、開会

II、会長挨拶

III、報告事項

1、総務部

- (1) 会員動向…新入会員を含む
- (2) 忘年会について 31名の出席、にぎやかに、楽しく開催できた。

2、研修部

- ・08/06(木)夏の森の観察会
- ・08/22.23(土・日)富良野原始が原 18名参加
- ・09/06(日)恵庭公園観察会 一般:4名 ボラレン:6名
- ・09/12.13(土・日)オホーツク支部秋季研修会 16名(オホーツク4・札幌11・富良野1)
- ・09/13(日)秋の花でにぎわう森を歩こう 一般:49名 ボラレン:9名
- ・10/3.4(土・日)鶴川研修会 12名参加
- ・10/15(木)秋の森の匂いをかごう 一般:52名 ボラレン:12名
- ・11/03(火)晩秋の森観察会志分別コース 一般:26名 ボラレン:17名
- ・11/08(日)秋のありがとう観察会 一般:64名 ボラレン:14名
- ・11/23(月)西岡水源地自然観察会 一般:27名 ボラレン:16名
- ・01/17(日)円山登山観察会

3、広報部

- ・「エゾマツ」90号発行 10月21日
- ・「エゾマツ」91号発行 1月21日

4、事務局

- ・8/28~30(金~日)ボランティア・レンジャー育成研修会
- ・09/15 下半期主催観察会チラシの印刷 エルプラザ
- ・09/16 下半期主催観察会チラシの発送
- ・09/04 ボランティア・レンジャー育成研修会反省会
- ・10/22 野幌クリーンクリーン作戦 8名参加
- ・12/14 三役・部長会議
- ・自然ふれあい交流館から御厚志をいただいたこと 会計への引き渡し
- ・自然観察ハンドブックの販売について 12000円。会計への引き渡し
- ・観察会保険料の会計への引き渡し
- ・観察会PR 毎月のこと…TGALへ・まんまる新聞社へ

IV、議事

1、総務部

- (1) 21年度の会計を閉めることの方法について
- (2) 21年度収支決算について
- (3) 総会案内について
- (4) 総会後の懇親会について
- (5) その他
- (6)

2、研修部

- (1) 平成 21 年度の観察会の結果と反省
- (2) 平成 21 年度の研修事業の結果と反省
- (3) 平成 22 年度の観察会・研修会案について
- (4) その他

3、広報部

- (1) 次号「エゾマツ」の発行について

4、事務局

- (1) 育成研修会の反省について
- (2) 平成 22 年度事業について
 - ①セイヨウオオマルハナバチ防除について
 - ②オオハンゴンソウの防除について
- (3) 観察会後の花合わせの記録の取り方と反省
- (4) 次年度の試みについて
 - ①観察会当番以外に役員でない人の協力をお願いすることについて
 - ②支部活動の活性化の視点から、総会時に支部長さんに出席していただくことについて
 - ③年間 3 名程度、交通費を会で負担して、地方会員が札幌の観察会に出いていただくことについて
 - ④写真展（含む絵画など）を開催することについて
 - ⑤会則をいじらないで、事務局長や副部長を置くことについて
 - ⑥その他
- (3) 総会開催について
 - ①日時：4月17日（土） ・受付 13：00～13：30 ・研修会 13：30～14：50
 ・総会 15：00～16：30
 - ②会場：札幌エルプラザ2階 環境研修室 I
 - ③研修会：講師について
 - ④議事録署名人
 - ⑤司会
 - ⑥選考委員（今年は役員改選の年）
 - ⑦次期役員について

V、閉会

編集後記

- ・表紙は熊野美子さんが「冬の支笏湖」をスケッチしたものです。
- ・小樽支部長の北原武さんが前田一步園賞を受賞されました。おめでとうございます。長年にわたって実施してきた、自然調査、研究発表、そして保護活動などが評価されたものと思います。私たちの会の誇りでもあります。なお、会長の田村さんが受賞式の様子をふくめてレポートしてくれています。
- ・オホーツク支部の機関誌「流氷」新年号を送っていただきました。表紙は流氷の浮かぶとてもきれいなカラーの写真です。今回は熊野さん、小栗さんの原稿を掲載します。次号には法師人さん、安部の原稿を載せます。
- ・平取町の川村さんから新しい植物調査の報告をいただきました。内容とともにステキなスケッチが送られてきています。残りのスケッチは次号に載せます。
- ・今年も多くの自然観察会、研修会を計画しています。また昨年に引き続いて外来種・オオハンゴンソウの防除をも予定しています。会員の皆さんの積極的参加をお願いします。
- ・今年は役員選挙の年です。自薦、他薦でみなさんの立候補を待っています。新しい役員のもと、会の一層の創造的発展をつくりだしていきたいものです。なお、役員選挙、総会については別の紙面に掲載しています。
- ・次号は、3月下旬発行予定。3月15日までに広報部、北広島の佐藤まで原稿を送ってくれるようお願いします。皆さんの原稿が広報部の力です。

「エゾマツ」

2010年 春季号

91号

2010年1月21日発行

会長 田村 允郁